

神奈川レパ反対同盟『証言でつづるレッドパージ六〇年』推薦！

[神奈川学習協「学習運動」393号 2012年3月刊]

下山房雄（神奈川学習協元会長）

レパの「真実を見る」証言二六本を集め、神奈川レパ反対同盟の加藤事務局長の運動総括的序言と、金子同盟代表委員の横浜弁護士会レパ人権侵害救済「勧告」を借りてのレパそのものの解説を冒頭に付した『レパ60年』の刊行を心から喜びながら、この正月を迎えた。本書「はじめに」で言われているように、レパ反対運動の「さらなる前進」に資し、多分野での護憲闘争を激励する事業だ。その前進・闘争のために、本冊子普及活動に大いに尽力したい。

暮れに機会あって、名前しか知らなかった木下空太郎の記念館を伊東に訪ねた。木下の文章に、「冬が一番美しい・・・海面は鮮碧」とある通りの伊東の景色でよかったが、木下の戯曲「和泉屋染物店」（一九一一年）を知って正月に読んだのもよかった。前進座にやって貰いたいような内容で、（あるいは既に上演されているか？）家を飛び出し足尾暴動（一九〇七）や大逆事件（一九一〇—一一）に関わった港町の紺屋の息子が元旦の夜、密かに家族を訪ねる話だ。母親に対する台詞に、家族には「まことに済まない事をしました。昔なら一門残らずお仕置きになるべきでした」とある。

「一門残らずお仕置き」とはならずとも、レパ被害者が本人のみならず家族の就職や結婚を公安警察に妨害され、一門崩壊状態に追い込まれた話しを『レパ六〇年』で何例も確認すると、民主主義が国賊思想であった時代の終わりは一九四五年ではなくて一九五〇年だったのかと改めて思わせられた読書だった。

二〇一〇年一二月一日開催「レパ六〇周年記念のつどい」（この集いのアピールも今回の『レパ60年』に収められている）賛同メッセージに私は、当初の「戦後民主化は、米占領軍に支援された上からの民主化が基軸でした。日本国民自前の力による民主化は、四九～五〇年のレパに反対する闘争に始まり、今日まで様々な局面で勝利を蓄積もしてきました。しかし、自前の民主化の口火を切ったレパ反対闘争は未だ勝利を獲得していません。頑張りましょう。」と書いた。その言葉をここでも繰り返したい。

— 神奈川県レッドパージ反対同盟「勇気のあかし」
(2012年2月臨時号5頁に赤字部分省略で掲載) —